

令和7年度まちづくりセンター開館準備業務 運営評価 評価シート

No	要求水準	事業名	事業者当初計画	実施内容	評価	コメント
1	○事業者は本施設の設計事業者に対して意見や助言を行い、まちづくりセンターのコンセプトが十分に実現されるようにつとめること。 ○施設の設計に対して助言等を行うものとし、町、設計事業者との連携を密に行うこと。 ○その他、開館までに必要な内容について町と協議の上、決定し、実施すること。	各種庁内協議 【資料：A-1】	引き続き運営管理定例会を中心に推進していくが、建築定例会や建築関係の舞台機構や外構などの分科会にも参加していく。また、適宜他部署との調整を行っていく。	○運営管理定例会を月2回のペースで24回実施した。 ○その他協議会・分科会として舞台機構分科会や外構分科会に計32回出席した。 ○上記の他、建築定例会に計48回オブザーバーとして出席した。 【協議内容事例】 ○オープニングイベントやオープン強化月間についての協議 ○条例関係（利用料金、優先利用など）についての調整会議 ○開館後の指定事業。自主事業についての協議 ○貸館予約システムについての調整協議 ○設計・建築の確認・協議事項についての助言 など	委員会 A	運営定例会では利用ルールや条例制定に向けた協議、開館後の運営に係る内容、オープニングイベントやオープン強化月間の実施内容について協議を重ねた。 建築定例会等に参画することにより、諸室名称やサイン関係、防犯カメラ設置位置などの助言を行いより良い施設環境整備に繋がった。 次年度は開館を控えていることから、開館後の使用を想定しながらブックラウンジの活用や諸室の利用ルール、使用料など開館時に未決事項が生じないように引き続き協議を重ねること。また既存施設との連携を意識しながら実施すること。
2	○町は、本施設の整備内容について、住民の理解を深めるとともに、利用者である住民の意見を本事業の運営及び設計等に反映すべく、「設計対話」を開催するので、事業者は、この設計対話に出席し、設計事業者と共に協力し、必要に応じて出席者に対してアドバイスを行うこと。	町民への当施設の理解促進 【資料：A-2】	引き続き開館後象徴的な事業となる「ミニくみ」や地域学「巨椋池学」関連のプレ事業を実施することで、センターの開館後のソフト面の理解促進を図っていく。	○「ミニくみ」や「巨椋池学」などをはじめとする年度内実施のプレ事業において、参加された住民に対して都度施設理解につながるよう説明を重ねて実施した。 ○11月2日の文化祭当日には、計6回にわたり建築現場見学会を実施し、ソフト面（運営面）だけでなく、直接ハード面からの理解にもつながるような機会を設けた。 ○1月18日のくみやまマラソン当日には、出張ブースをグランハット工事現場前に設置し、パネルでの建物や諸室用途の説明を行い参加者からの諸室の使い方などの質問に応じた。またLINE登録への勧誘を行い、今後の継続的な施設の理解促進を図った。 ○事業の展開や来年度事業の計画に際して、町内の関係する諸施設（小・中学校等）や寺社、農家、郷土史家などにも都度施設理解につながるよう説明を重ねた。	委員会 A	建築現場見学会を実施するなど町民の方に対して施設の理解促進が図れた。また、くみやまマラソンでの出張ブースを展開することで町外の方向けへの理解促進が図れた。他にもプレ事業を通じて参加者のグランハットに対する理解を深めることができた。次年度は開館を控えているため、よりグランハットがどのような機能を備え、年代を問わず多様な生涯学習活動ができる施設であるか、町内外のたくさんの方に理解促進が図れるよう取り組むこと。
3	○施設の運営に関するまちづくりセンター企画運営委員会（仮称）の事務局の運営を行うこと。 ○本施設の利用率や魅力向上等に資する意見については、町と協議の上、管理運営業務に適宜反映すること。	機運醸成と町民参加促進支援 【資料：A-3】	開館後の事業に関連し、町内企業や団体にも事業への参画・協力を積極的に呼びかけていく。また、「ミニくみ」の大人スタッフについては企画運営委員だけでなく公募による一般住民の参画を呼びかけていく。	○プレ事業「ミニくみ」（12/6）の実施に向けて事前準備として計7回の「こども会議」を開催し、「こども会議」では企画運営委員がおとなスタッフとしてこどもスタッフたちの相談に乗りつつこどもの自主性を引き出すことに努め、本番に至るまでサポート役に徹した。なお、企画運営委員以外に一般公募により3名の「ミニくみ」おとなスタッフの参画を得ることができた。 ○事業の展開や来年度（令和8年度）事業の計画に際して、町内の関係する諸施設（小・中学校等）や寺社、農家、郷土史家、町内企業など事業への参画。協力の輪を広げた。 ○地域連携の一環として、令和8年度以降の事業として京都市立芸術大学との連携を開始した。	委員会 B	子どもを対象とした事業だけでなく、「巨椋池学」探訪まちあるきツアーにより幅広い年齢層の機運醸成の促進に繋がっている。また、企画運営委員会を定期的に開催できており、「ミニくみ」や「こども会議」を通じて機運醸成、町民参画の促進に繋がっている。今後は企画運営委員会を活用しつつあらゆる世代に向けた施設づくりを促進すること。また個人でもふらっと参加できるような事業展開に取り組むこと。
4	○事業者は設計事業者と協力して、多くの住民に周知できるニュースレターの作成を行うこと。発行回数（※開業準備期間中）は3回程度とする。 ○開館に関する広報等を行うこと。	ブランディングと広報 【資料：A-4】	ブランディングについては、愛称・ロゴ・イメージカラーが決まったのでこれを展開していく。広報については、従来の手法に加えて秋頃をめどに庁舎懸垂幕による新たな広報を予定している。	○ニュースレターを発行し、町広報誌への折り込みを行い全世帯へ配付を実施した。 ○チラシなど印刷物には「愛称（グランハット）」「ロゴ」「イメージカラー（オレンジ色）」を使用し、ブランディング・イメージの普及に努めた。また、ロゴ・グッズ試作品の住民への配付やグランハットのぼりもの作成、文化祭50周年のうちわの作成など、様々な手段でのイメージ展開に努めた。 ○開館を控えてSNS（LINE、Instagram）やHPによる情報発信を行った。※参照：LINE登録者数→148、Instagram登録者数→338、HP閲覧数→13,720	委員会 B	ホームページの活用やSNSの運用、チラシへの「愛称（グランハット）」「ロゴ」「イメージカラー（オレンジ色）」掲載、グッズの作成など幅広い広報活動ができています。他にもくみやまマラソンの出張ブースによるLINE登録者増加に向けた活動も機運醸成に繋がった。しかしSNSの活用について改善の余地が見受けられるため、今後は開館に向けて各種媒体を積極的に活用した更なる情報発信が求められる。またショート動画などを駆使し更なる情報発信に努められたい。
5	○開館後の管理運営業務に関する実施計画等（催事計画等）を町等と調整しながら作成すること。 ○開館にあわせて人事配置、育成等を実施すること。	業務推進・自主事業推進 【資料：A-5】	業務については、建築の進捗、条例の策定、指定管理仕様書の策定に合わせた推進を予定している。各事業やオープニング計画について準備を推進する。また、可能なところからマニュアルの作成を順次進めていく。	○各種業務委託予定事業者（施設管理、清掃、警備、舞台、カフェ等）と各部門について開館準備業務や開館後の業務について引き続き協議を進めた。 ○プレ事業の2本柱である①「巨椋池学」から「まちと人をつなぐ土木の世界をのぞいてみよう！ドボクのチカラ再発見ツアー久御山ジャンクションの見方教えます」（9/12）と②「ミニくみ」（12/6）を実施したほか、計21コマの事業を実施した。 ○統括責任者が、引き続き「いきが大学」継承企画や地域学（『巨椋池学』）関連講座の講師候補となる先生や住民との話の機会をもち、開館後の事業編成のための情報収集を行い、開館を控えて具体的な調整を行っていく。また連携を想定している町内外の団体等についても引き続き調整を行った。	委員会 A	施設予約システムの仕様検証及び研修参加や、事業計画の仮案、ホール及び諸室の利用料金や利用に関する業務マニュアルの作成に向け、計画的に検討ができています。プレ事業については、「巨椋池学」や「ミニくみ」など幅広い世代を対象としたプレ事業を積極的に実施できています。来年度の開館を見据え、各プレ事業において参加者の確保や参加者が意欲的に参加できる内容となるよう改善を図ること。開館に向けて引き続き管理運営業務や自主事業の工夫も図るとともに、人員配置・育成等をスピード感を持って進めること。

評価基準
A：達成できた
B：概ね達成できた
C：達成できなかった